翻訳

求む、希望

A・サマラキス・作
山口喜雄・訳

その日の午後、いつもより少し早い時間に喫茶店に入った。道路に面した大きなガラス窓を背にしてテーブルにつき、コーヒーを注文した。近くの席では客がカードに興じていたり、議論を楽しんだりしていた。

コーヒーがきた。たばこに火をつけ、二口ばかりコーヒーを啜ってから、夕刊を広げた。

インドシナで新たな戦争が始まっていた。「双方に重大な被害が出た」と、特電が伝えている。

さらに、日本の漁船が放射能を浴びて帰港した、とも書かれていた。「今、新たな世界大戦の影が長く伸びつつある」という別の記事の見出しもあった。

その後も他の記事を読んだ。国家財政の赤字や教職員の異動。あと誘拐事件が一件、暴行事件が一件、自殺記事が三件。自殺事件は、うち二件が経済的理由によるもので、自殺者は三十歳と三十二歳の青年である。前者はガス栓を抜き、後者はピストルで自殺した、とある。

別の頁にはピアノ・リサイタル評が一つ。次にファッション関係。最後は「社交界往来」。

―一昨日、M・T夫妻主催のカクテル・パーティで、優雅なプリント・ドレスとシックなトック帽のB・X夫人がエレガンスを極めたように輝いていた。またO・N嬢の優雅な登場も見られた―。

二本目のたばこに火をつけ、「小さな告知板」に目を移した。

「売りたし。」

新築一戸建。高級建築。四寝室、リビング、キッチン、風呂、トイレ付き。

「貸したし。」

実直な方に部屋貸します。二階。風通し良好、日当り良好、…。

「求む。」

不用になったピアノ、…

いくつもの想いが胸を去来する。

第二次世界大戦が終わってからも、第三次大戦の黒い影がわれわれの上に重く被さり続けている。こうしている間も血が流されている。昨日は朝鮮半島で、今日はインドシナで、そして明日も何処かで。

髪を掻きあげた。額の汗を拭った。暑くもないのに汗をかいていた。

戦争、水爆、経済的理由からの自殺。それに「社交界往来」……これが現実のパノラマだ！

戦後われわれの生活は決していい方向に変わったことがなかった。すべてが以前のままだ。それでも、戦争であれだけ大量の血が流されたのだから何か変わってくれるだろう。地球上の数千万の人々と同じように、われわれも希望だけは持っていたのだが。どうすれば平和がくるのか、どうすれば戦争の悪夢がこれ以上この地上に影を落とさなくなるのか、どうすれば経済的な理由からの自殺者が出なくなるのだろうか、どうすれば…。

陽が翳ってきた。向かいの商店街はすでに何軒かの店に灯が点っていた。喫茶店はまだ灯をつけていなかった。わたしにはこんな薄明かりが気に入っているのだが。

今日われわれを脅かしている混沌について考えた。思想上の混沌について、社会生活上の、またその他の分野における問題について考えた。

いまこのようなことを考えているのは新聞のせいではない。この頃わたしはずっとこれらのことを、ある時はぼんやりとではあるが、ある時は大きな緊迫感を以って考えてきた。生活の暗さについても考えた。平和のことを、一本の糸に辛うじて縋り付くように、強い願望としての平和について、貧困や悲惨について、また心の中に侵入してくる恐怖について考え続けた。

そばの鏡に自分の顔が映っていた。全くいつも通りの顔である。内面の不安など少しも表れていない。

この前の大戦ではわたしも戦った。そして希望も持った。でも今はとっくに希望を失っている。さらに、希望が持てないことを自分の中で認めることにも平気になっている。

どんな希望も打ち消してしまうのがわたしの日常になってしまった。以前は希望を持っていたし、その後もずっと持ち続けてきたが。

かつて何年も前、コムニズムに希望を託したことがあったが、それも否定してしまった。今ではどのイデオロギーにも希望を持たなくなっている。

水をもう一杯頼んだ。口先だけのイデオロギーを否定

することが今や一般現象である。そして否定の後は疲労となり、無関心となった。殆どの人が様々なイデオロギーに対してそのように感じている。

新聞を広げたまゝ、とめどなく道路を通り過ぎて行くトロリーや人ごみを眺めやった。新聞は広げたままだ。先刻みんな読んだばかりである。新たなる戦争の影、インドシナ、経済的理由による二人の自殺者、そして「社交界往来」……。

―たばこは要りませんか？

たばこ売りが入ってきた。一箱買った。それから新聞の六面にある暮らしの記事を見た。今はわたしも希望のないただの人になっている。昔を思い出した。

まだ子供の頃、叔母が重病を患っていた。母の従姉妹である。一つ家に暮らしていた。医者がやってきた。病人の部屋から出てきた医者は、改まった口調で言った。

―もうこの先、望みはありません。

わたしは自分自身のことに想い及んだ。

―もうこの先、望みはありません。

もう望みはないのか、と恐怖に襲われた。喫茶店の人がみなわたしを見つめているように思える。路上の人までもが「あそこに居るあの人にはもう望みがないんだって！」と、囁きを交わしているように思えてくる。何か罪を犯したかのようだ。罪を告白した人、とでも顔に書かれているかのようだ。まるで服を着た人々の中に裸のまゝ立たされているようだ。

必死でもがいている自分に小さな脱出口を見つけようとして書いた小説のことを思った。戦争とか、社会問題とか、現代の主題を扱ったものだ。しかしわたしはその本を出版しかねていた。怖かったのだ。何と言っても、自分に貼られるアカのレッテルが怖かった。いや、それを剥がさねばならなかった。レッテルなんて糞食らえだ！

わたしは並の人間であり、それ以外ではなかった。左翼でもなければ、右翼でもなかった。かつて希望を持っていた普通の人である。今は希望を失っているだけだ。でも、それを語る義務があると考えている。いつか希望を持てる日がやってくると考えている。希望を持つ以外にないのだ。

また新聞に目をやった。インドシナ、ピアノ・リサイタル、経済的理由による二人の自殺、「社交界往来」、そして「小さな告知板」……。

「求む」タイプライター…

「求む」ラジオ付き電気蓄音機…
「求む」状態のよいジープ…
「求む」本物のペルシャ絨毯…
手帳を取り出し、一枚を破りとり、鉛筆を走らせた。
「求む」希望。
その後に、わたしの名前と住所を付け加え、ギャルソンを呼んだ。
支払いを済ませ、直ぐにも新聞社に駆け込みたかった。そのメモを渡して頼みたかった。どうしても明日の朝刊の「小さな告知板」に掲載すべきだと、主張したかった。

*

アンドニス・サマラキス（作家）

一九一九年アテネに生まれる。アテネ大学で法律学を専攻。労働省に勤務。ギリシア及びＩＬＯ代表としてヨーロッパ・アメリカ・アフリカ諸国を視察。一九八〇年代には二度に亘り飢餓救済運動のためのユニセフ協力隊員としてエチオピアに派遣される。アテネ在住。

*

本訳文の原本は'Αντώνης Σαμαράκης; Ζητείται ελπίς. 58η έκδοση. Αθήνα, Καστανιώτης 1999'に所収されている十二編の短編小説の表題作である。初版は一九五四年でサマラキスの処女作でもある。同書には彼の作品を特徴づける問題意識と創作方法がすでに顕われている。サマラキス作品の主要な特徴は、社会的テーマを扱い、かつその語り口が推理的手法に基づいているので、常に読者をはらはらさせながら問題を提示していることにある、とされている。

サマラキスのこの短編集は、一九六二年にギリシア短編小説国家賞を、一九八二年にはフランス語版がブリュッセルでヨーロッパ文学賞を受賞している。今日までにギリシアで二十二万三千部が発行されている。

他の作品には「Σήμα κινδύνου」（一九五九）、「Αρνούμαι」（一九六一）、「Το λάθος」一九六五）、「Διαβατήριο」（一九七三）、「Η κόντρα」（一九九二）、「Αυτοβιογραφία 1919—」（一九九六）、「Εν ονόματι」（一九九八）がある。サマラキスは、これらの作品で海外も含め、七つの文学賞を受賞している。

*

本編訳了後、「ギリシア文学勉強会」（仮称）で紹介したところ、福田先生の対訳「現代ギリシャ短編集」（大学書林）に'ご高訳があるとの指摘を受けた。なお、長編「Το λάθος」の邦訳書として小池滋訳「きず」（筑摩書房）がある。